

研究者と巡るセメント美術

美術史研究者 坂口英伸

No.15 少年航空兵像

今回は彫刻家の長沼孝三（ながぬま・こうぞう、1908－1993）によるセメント彫刻である《少年航空兵像》（1943年）を見る目的で、所沢航空記念公園（埼玉県所沢市）に赴いた。航空公園駅（西武新宿線）で下車すると、眼前に埼玉県内の県営公園として最大規模を誇る園地が広がる。

所沢市が日本の航空発祥の地といわれる所以は、1911（明治44）年に所沢に日本初の飛行場となる所沢飛行場が開設されたことによる。同年4月5日の同場では、清水徳川家第8代当主で陸軍軍人であった徳川好敏（とくがわ・よしとし）大尉がアンリ・フォルマン機で、続いて日野熊蔵（ひの・くまぞう）大尉がライト機でそれぞれ飛揚したと伝わる。その跡地に造られ1978（昭和53）年3月に開園したのがこの所沢航空記念公園なのである。園内には、航空発祥記念館や所沢市立図書館をはじめ、日本庭園、茶室、野外ステージ、テニスコート、野球場、ドッグランなど多種多様な施設があり、楽しい時間を過ごすことができる。

《少年航空兵像》は公園中央の放送塔の近くに位置する（図1・2）。同作は3人の少年航空兵から構成される群像で、それぞれ操縦・通信・整備を象徴する。これら3体の像がそれぞれ協力する様をこの作品は表現しているのである。頭を上方に傾けて空を見上げる3人の少年は、まるで空高く飛翔する航空機の姿を見つめているかのようだ。一際目立つ中央の少年は両手で翼を抱く。向かって左の少年は中腰で、向かって右の少年は膝をつき、それぞれ翼を支える。少年航空兵とは旧日本軍の航空兵のうち、徴兵年齢以前の者（20歳未満）を対象にした志願制による航空兵を指す。各種軍学校で航空関連教育を受けた彼らは、卒業後は空中勤務者（操縦者、航空機関士、通信士など）と地上勤務者（整備兵、通信兵など）たる下士官の中核を形成したという。

本作は長沼が1943（昭和18）年の第2回大東亜戦争美術展（主催は朝日新聞社、会場は東京都美術館）に《航空整備兵》という作品名で出品したものである。同作は翌年の5月21日に所沢飛行場にあった所沢航空整備学校内に設置され、「当時の少年飛行兵や整備兵のシンボルとされた」（現地の案内板）という。

長沼は山形県長井市の商家である丸大扇屋に生まれ、1931（昭和6）年に東京美術学校（現在の東京芸術大学）を卒業し、昭和初期のモダニズム運動の影響下で実験的な彫刻創作に挑み、現代具象彫刻の先進気鋭と評された。長沼はセメント彫刻の名手でもあった。

第二次世界大戦時下では、長沼は軍需生産美術推進隊に入隊、東山油田（新潟県長岡市）や常磐炭田（福島県および茨城県）などで「坑夫の像」を共同制作し、過酷な環境下で働く労働者たちの士気を鼓舞した。戦後は焼け跡からの復興と平和な社会を願い、いち早く19

49（昭和24）年に上野駅前広場にセメント彫刻《愛の女神》を制作、これは戦後最初期の野外彫刻の一つに位置づけられる重要な作品であった。そして長沼は1950年代から小野田セメント株式会社が協賛した野外彫刻展覧会にもたびたび出品し、そのいくつかの作品は現存する。

戦後の所沢飛行場は米軍に接収され、1971（昭和46）年に日本へ返還された。その翌年に結成された「所沢航空資料調査収集する会」は、劣化してしまった像の修復と後世への継承を決め、1997（平成9）年に長沼孝三彫塑館（山形県長井市）の協力を得て修復工事を実施した。そして2005（平成17）年12月に同作は現在地に移設された。戦中期の作品が修復工事を経てこうして現存することに嬉しさを感じた今回の訪問だった。



図1 長沼孝三《少年航空兵像》（1943年）



図 2 空を仰ぐ少年航空兵